
片想いの切なさ 番外編

ホワイトピンク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片想いの切なさ 番外編

【Nコード】

N4320M

【作者名】

ホワイトピンク

【あらすじ】

『片想いの切なさ』という私が書いた連載小説の、番外編です。それを読んでからの方が分かりやすいとは思いますが、まあこれだけ読んでも相当入って行けると思います。

本編第1話に一瞬だけ出てくる梨花の初恋の相手、潤が主人公のお話です。

梨花と拓海のその後と、潤の想いを書いてみました。

梨花と拓海のイチャつきぶりを書いてるうちに、潤が可哀想になってきた作者でした。

俺は、また、ため息をつく。

まだ忘れることができない、あのトキメキを感じて、ため息をつく。
佐藤潤。15歳。身長170cmの普通の男子中学3年生。

俺は今、猛烈に恋をしている。

今、というか。

もうかれこれ4年にもわたる恋だ。

小学6年生の時に好きだった女の子に、未だに恋をしている俺は、目を閉じる。

4年前のことだ。

小学校の教室で、俺はその女の子 梨花に借りていた本を返した。
バッグに雑にいられていたせいで、少し折れ曲がった本だった。

「潤のバカ！私の本を こんなに ビリビリに ！？」

少しわざとらしく演技をしながら梨花は言う。

「ごめーん？でも、本っていつでも帯の端っこちょっと折れてるだけだし。お前心狭くね！？」

俺はムキになって言い返した。

すると梨花は俺の背中を思いっきり引つ叩く。

「もう！潤に貸した私がバカだった！」

「いてえー！！分かった。弁償するからあー」

「680円ね。」

「うわ。30円増してきたコイツ！セコッ！」

「うまい棒3本だもん。」

「 いや、だからなに！？！？笑」

なんて。

二人で笑い合った休み時間。放課後。

4年も前のことなのに、ハッキリとよみがえってくる。

こんなにも人のことを好きになったのは初めてで。

これが初恋なのか。

だとしたら、これは叶わない恋なのか。

そんなことを思い、俺はまたため息をつく。

梨花とは違う中学校になってしまい、だから卒業式以来一瞬たりとも梨花の姿は見えていない。

でも、きつと可愛いもつと女の子になっているんだろうな

と、梨花の成長した姿を妄想してしまう自分がちよつとム力つく。そしてため息をつく。

俺と梨花は付き合っていた。

多分、今も。きつと。絶対。

俺は信じる。

卒業式に梨花が言った、『絶対ずっと好きだから』の言葉を、俺は信じる。

とりあえず、俺は梨花のことがずっと好きだ。

これからも、そうだと思う。

中学に入ってたくさんの女子に告白されてきたが、梨花に届く程の女はいない。

秀才だけど可愛くて、ちっちゃくて、優しくて、よく笑う、女。

そんな女子は確かに存在するが、梨花には言葉にできない魅力があった。

俺は梨花と話した時や、目が合ったときのドキドキが今でも忘れられない。

梨花も俺と同じ気持ちでいてくれるかな？

日曜曰。

俺はテスト明けの清々しさの中、街中の本屋さんへ向かった。

何を買おうか。

テストの点が良かったため、余分にもらったお小遣いを手に、俺は心を躍らせながら自転車をこいだ。

本屋に着き、自転車を止め、鍵を閉め。

俺は文庫本コーナーへ向かった。

男子だからって俺は漫画ばっか読んで生きている訳ではない。

読書家を気取っているそこらへんの女子なんかよりも、持っている本の数は格段に多い自信がある。

多分これは、梨花の影響だ。

梨花は大の読書家だった。

俺はいつだって梨花の本と被ると良いな、なんて思いながら本を選ぶ。

すると突然、若いカップルのでかい笑い声が本棚越しから聞こえた。かん高い女子の声が鼓膜を揺らす。

キレイな声だな

俺は耳を傾けた。

「拓海　これ読んだことある??」

「ええ? ああ、あるよ。お前は?」

「私無いんだよねえ。面白かった?」

「　　いいか梨花。面白い面白くないは人それぞれだから、俺が面白いと感じたものが必ずしも梨花の心を動かすとは限らないんだぞ。だから俺に聞いても無駄だ。分かるか?」

俺は男子の『梨花』という言葉にビクンと反応する。

俺が知っている梨花だとしたら、この男は誰だ。

いや、違う。絶対違う。梨花なはずがない。絶対、違う。

でもその声の主の顔を確認する勇気が、俺には無かった。

だから立ち読みをしているフリをして本棚越しから聞こえる声に耳を傾けた。

「もう! 拓海のパカ! 冷たいよお。拓海が好きなのは私も好きなの!」

なんて訳の分からない理論を展開する女子。

「俺の好きなもの？ じゃあお前、自分のコトが好きなの？」

「へ？」

「俺の好きなものは梨花だけだよ。」

そんな甘いセリフを軽々しく言う男子。

うう。許せない。

だけどすごくロマンチックな発言。

梨花はこの男に ？

いや、だからこれはただの同名だ。

ただそれだけ。

でも、なんだか女の声が聞いたことのあるような声に思えてならない。

しゃべり方といい、笑い方といい、俺の知っている梨花にそっくりだ。

いや、でも、4年も経っているわけだし、俺の勘違いだっていう可能性の方が高い。

梨花なんて名前の人間は日本中に山ほどいるはずだし。

俺は自分を納得させるように笑顔でうなずいた。

「 ？」

「拓海カワイイよおゝなに今のゝ」

「へ！？今のは結構ロマンチックな感じなんだったんじゃないの！？このままキスとかそういう展開なんじゃないの！？え、俺損した？」

「 っ！拓海！カワイイよお 女子より 私よりカワイイなんて反則だよお 」

「馬鹿！？お前男子に可愛いって言うとか、それこそ反則だろ。」

「拓海 可愛い可愛い可愛い可愛い！」

「オイ！」

ヒト事だと確信したら、なんだかこのカップルがすごく笑えてきた。面白い奴らだな 俺もいつか梨花と なんて思っていないからな。断じて。

「分かったよお。拓海くんはイケメンです。男前の超ハンサムです。いや、でも、お世辞じゃなくても、マジでイケメンだよ。これは本当。」

「そんなに見つめないでくれ。照れる。」

「いやぁーん。くぁわいい？男前なのにそういう発言をするから可愛いなんて言われるんだよ？」

「分かった。もうなにも言わない。梨花となんか一生活さない。」

冗談めかしていった男子は軽い足音を立てて歩き出した。くそつ。話し声が聞こえなくなる位置にいかれたら困る。

いや、別に俺の知っている梨花じゃないから、いいんだけど？

でも、さ、一応、さ。ラブラブなカップルのお手本として一応会話を聞きたいなぁーみたいな？

と、俺は自分のストーカー心に言い訳をする。

そうしているうちに、男子はいつの間にか俺が立っている通路に歩いてきた。

俺は興味本位でそいつの顔を見る。

うわ。コイツ本気でイケメンだ。

白い肌の一つ一つのパーツのバランスが絶妙に整ったそいつは、男の俺でもドキつとしてしまうようなイケメンだった。

俺と同じくらいの歳だろうか。

俺より少し背が低いことが、俺を安心させた。

「？」

俺が彼に見入っていると、不思議そうにそのイケメンは俺を見つめ返してきた。

いや、あの、なんでもないです。

俺は即座に目をそらし、本に視線をおとした。

すると女子がスタスタとそのイケメンを追って通路に入ってくる。

その女子の顔を見る勇氣は、なぜか無かった。

「拓海！レディーをおいて行っちゃうなんてジェントルマンとして最低の行 あれ？」

女子は言いかけたまま固まった。

そして俺の方へ向かってくる足音。

すごくイヤな予感が俺を包んだ。

「潤？」

俺の名前を読んだ彼女は、目を大きく見開いておれの顔をのぞきこんだ。

俺はその女子の顔を見つめ返す。

可愛い。

そして美人だ。

しかし小学校の頃の面影が残っていることに少し喜びを感じる。と、同時に、悲しみを感じる。

そう。その女子はまさしく俺が知っている梨花だった。

俺が大好きな梨花だった。

「梨花じゃん。やつほーお久じゃあまた今度さようなら」

俺はそう言つてそそくさとその場を去る。

きまづすぎて頭がおかしくなりそうだったからだ。

「いや、ちよつと待ちなさいよ！潤！」

梨花は叫ぶが、俺はそんな梨花の優しさがすごく悔しくて、唇を噛み締めながら本屋を出た。

大好きな人。

それもまだ別れていない、つまりまだ一応付き合っている女子の、デートに出くわすなんて。

そりゃ、まあ、4年も経っていれば、梨花は自然消滅したって思ってたんだろうな。

女と男の恋愛観ってやっぱり違うんだな。と、本気で思う。

さっきの2人のイチヤツキを思い出すとさらに本気で悔しい。

そして俺は、ああ。やっぱり初恋って実らないんだな、なんて思いながら、一人マクドナルドで泣いた。

ハンバーガー5個とドリンク3本をやけ食いやけ飲みして、俺は泣

いた。

しょばいなあー俺。

これでお腹壊したら本当にしょばい。

そしてそんな自分が笑えてきて思わず笑みがこぼれた。

するとまた嫌な話し声が聞こえた。

さっきの本屋で聞いた声と同じような声。

同じようなしゃべりかた。

雑音であふれた店内でも、はっきりと聞こえる澄んだ声。

思わず周りの人が振り向いてしまうような美男美女カップル。

美少女に成長していた梨花と、俺もドキっとしてしまったイケメンが、レジのカウンターに立っている。

拓海は梨花の頭に手をのせて、商品が来るのを待っていた。

スッゲー悔しい。

それは梨花に裏切られたという事実、なのか？

いや、違う。梨花は悪くない。

すぐく、梨花のことが好きだったから。

いや、今も好きだから。

梨花は悪くない。悪いのは俺だ。

4年も連絡なんてとらずに、関係をキープなんて図々しいにもほどがある。

あんなに可愛いものだから、モテないはずがないのに。

あのイケメンは、やっぱり彼氏なのか？

だとしたら、俺の入る隙間はないだろう。

全てにおいて俺の負けだ。身長以外。

俺が敗北感に浸っていると、

「すみません。本屋さんにいましたよね？」

あ、拓海っていいます。」

と言いながら、梨花の彼氏らしきイケメンが俺のテーブルに腰掛け

てきた。

おい。勝手に人のテーブルにトレー置くなよ！

まあ4人がけのテーブルに一人で悠々と座っていた俺も悪いのだが。そして俺は口を開く。

「どうも。潤です。」

なぜかすごく緊張して声が上がってしまった。

「潤くん？って呼んで良いかな？」

結構フレンドリーなやつだ。という感想。

「潤でいいよ。」

俺は初対面の人と2人きりでこんなに会話が続いたことに感動した。

「俺のコトも拓海って呼んでください！あ、梨花と同じ小学校だったんですよね？さっき梨花に聞きました。あ、今梨花トイレに行つてて　　もうすぐ帰ってくるはずなんだけど　　。あ、でて来た。」

よくもまあしゃべるやつだ。

お前は女子か。とつつこみたくなる。

しかしつつこむ前に、梨花が満面の笑みで言った。

「拓海！あ、潤も！？え！？なに！？ドンだけ仲良さそうなの！？！？」

梨花は小学校の時と変わらないテンションと笑顔で小走りで俺のテーブルに座った。

ちなみに拓海の隣に。

「俺たち、もう友達だし。あ、メアド持ってる？」

「あ、うん。交換する？」

俺は多少戸惑いつつも、言った。

きつと拓海は、学校でも友達に囲まれてる明るくてさわやかな男子なんだろうな。

初対面の人と、こんな風に気軽にメアドを交換できるなんてスゴいと思う。

多分女子にもなんのためらいもなく話しかけられるんだろうな。

しかもこの顔だから、すごく人気があるヤツなんだろうな。

俺はさらなる敗北感と、拓海ほど良いヤツなら梨花が惚れるのも無理ないか、という諦めでいっぱいだっただ。

「潤と拓海か。。。いいな。どっちも美男子すぎて引くけど。」

俺は梨花に拓海よりも先に名前を呼ばれたことにすごく心が弾んだ。そしてそんな弾んだ心を悔しく思う。

「そ、そんなことないよ。梨花と拓海こそ美男美女カップルだよな」すごい自虐行為だったと思う。

でも、ここで、『ちよつと、そんな関係じゃないわよ』、とか、否定して欲しかったから、あえての強行作戦に出たのかもしれない。

俺は身構えた。

でも、梨花と拓海は少し嬉しそうに顔を見合わせていて。

俺はそんな2人を、もう見てられなかった。

「ごめん。じゃあ。」

俺は傷ついたこの心を癒すべく少し離れたモスバーガーへと自転車をこいだ。

太るなあーなんて思いながら。

（後書き）

このものがたりは、題名通り、『片想いの切なさ』の番外編です。これを読んでから本編を読んでも、ストーリーがつながってあなるほど。と思える部分がたくさんあると思いますので、ぜひどうぞ。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4320m/>

片想いの切なさ 番外編

2011年1月27日13時31分発行